

「第8回WHC 42会開催記録」

朝晩はまだ寒いものの、日中は春本番を思わせる陽気になった3月24日（月）、再会后8回目となった42会を、江東区の清澄公園で開催しました。

桜の開花は年によって大幅に前後しますが、東京のソメイヨシノの開花日を5年ほどさかのぼると、いずれも3月の、16日、31日、28日、22日、21日となっています。今年の冬の寒さは昨年と同じような傾向だったので、昨年並みの開花に期待をしていましたが、3月に入ってから一向に暖かくなり、例年ですと2月中、昨年は3月1日に吹いた春一番が吹いたのは、ようやく18日になってからでした。

会場の清澄庭園は、一説には江戸時代の豪商、紀伊國屋文左衛門の屋敷跡と伝えられており、その後、岩崎彌太郎が社員の慰安や賓客の招待所として造園した、明治の庭園を代表する「回遊式林泉庭園」です。

雲一つない青空のもと、清澄庭園に近い本誓寺のソメイヨシノが陽光をいっぱいに浴びて十数輪の花をつけており、これが標準木なら間違いなく「開花宣言！」というところでしたが、隣接の清澄公園（庭園とは別）にあるソメイヨシノの古木はつぼみのままで、この日は、靖国神社からも東京開花との便りは届きませんでした。

午後0時20分、庭園入口に集合したのは15名。まずは庭園の散策をしました。真っ先に目に付いたのは、水面に垂れる芽吹いたばかりの青柳と池の中を悠々と遊ぶキンクロハジロなどの鴨の仲間。花は、大正記念館の脇に咲くピンクののあんずが可愛く、足元のフクジュソウや椿、サンシュユなど。奥の広場にはカンヒザクラが精一杯咲いていて、それはそれできれいなのですが、ソメイヨシノの華やかさにはかないませんし、3人のお姫様の方がずっと華やかでした。

この庭園のウリでもある名石などを眺めながら、のんびりと一回りして園内の「涼亭」に入りました。池（大泉水）に張り出す趣のある部屋で、37畳のひろびろとしたお座敷です。

開会に先立ち、昨年12月に逝去された植村政彦君、われら42会では最初の鬼籍入りとなった植村君の冥福をお祈りして、黙とうを捧げました。

それからは恒例どおり、42会産みの母・日向寺の開会宣言がなされ、次いで清澄（きよすみ）公園の名付け親を自称する皆川清澄（きよすみ）の発声による乾杯でいよいよ大宴会開始。

田上差し入れの栃木銘酒「四季桜」一升瓶の栓が抜かれ、深川御膳なる料理をつつきながら、ひとしきりおしゃべりした後、出席者各人の近況報告に移りました。毎年聞いているせいか、あるいは70歳前後の落ち着いた生活に入ったためか、目新しい内容は少なかったようにも思いましたが、それでも新しいことにチャレンジしている方もおられましたし、それぞれが充実した日々を過ごしている様子がうかがえました、特に「山靴の底」の話になって座が沸騰したのが印象的でした。西海からは植村君の学生時代から昨年までの写真などを収めたCD-Rが配られました。



田上差し入れの栃木銘酒「四季桜」一升瓶の栓が抜かれ、深川御膳なる料理をつつきながら、ひとしきりおしゃべりした後、出席者各人の近況報告に移りました。毎年聞いているせいか、あるいは70歳前後の落ち着いた生活に入ったためか、目新しい内容は少なかったようにも思いましたが、それでも新しいことにチャレンジしている方もおられましたし、それぞれが充実した日々を過ごしている様子がうかがえました、特に「山靴の底」の話になって座が沸騰したのが印象的でした。西海からは植村君の学生時代から昨年までの写真などを収めたCD-Rが配られました。



今回参加できなかった人からのメッセージや近況についての報告があり、その後、これも今年で8回目になるOB夏合宿（吾妻連峰）の計画概要が示され、参加者の仮募集を行いました。今年もにぎやかな合宿になりそうです。

深川御膳ということで、ご当地の深川飯（あさりご飯）もいただき、3時半にコーヒーとケーキが配られてからの第2部では、小坂作成の歌集を手にして、植村君を偲びながら、「四季の歌」「夏の思い出」を斉唱しました。

廊下に出て、池を眺めながらしばし憩い、最後に全員での記念撮影の後、小坂の音頭で3本締めを行って、4時半に散会しました。

暮れはじめた大泉水を前景に、木の間から東京スカイツリーがのぞいていました。

ソメイヨシノの開花前で「花見の宴」には間に合いませんでしたが、今年も楽しいひとときを過ごすことができました。 「清澄で 花より団子 春の宴」



五十嵐 昭